



へ達
2651
3-1



2551
1-3

石次村の夜

粘る夜

イ
チ

序

正月十日
寺

寛永九年の始小諸人敵と延一庚午此
年に向あき。之の朝回乃海を浪路
うらうらに赤髪れ釣喜あるま人も坊保
昨の侍と見く松人もまのが家に以稿
脱て妹とぬる夜の初夢とむすひ
賞え谷川とせく物もまの春は花に

先達。陸も池の端小唄うて。正月朔と
述る。ままれ。姿あ。びや。柞一刻。金れ
夜と。宵。い。寝。む。あ。う。や
惠方に向て。影乃。既。面造り。ま
ま。と。語。ま。ば。楊。栗。に。尻。込。する。若。婦。よ
他。と。流。さ。や。雷。と。深。め。て。虚。を。詰。を
福。う。する。廿。年。に。腰。筋。と。音。の。せ。怪。後。よ

新造耳を。同。も。み。柄。も。ま。あ。目。ね
口。を。用。て。悦。ひ。鞠。つ。も。あ。あ。も。手。に
少。く。同。彼。魔。弓。持。し。矢。の。物。も。是。が
あ。に。足。を。収。系。ま。夜。晝。活。し。影。乃
救。く。半。集。て。書。林。よ。送。り。其。人
伊。静。親。房。が。利

宝曆十辰歳壬春吉日

目録

○ 徳臣の仙人

○ 獅獅の相撲

○ 河洲の大蛇

○ 芝の神社

○ 滝口の章奥

○ 旅人の手柄

○ 猫兎の忠死

豊の弥話談卷一

○ 徳臣の仙人

静観房好河述

夫玄圃小道遙々屢東海の塵を揚々と看
 丹丘小嘯傲々々幾度々桃花れ室と借れ
 見ゆる是をに若君之皇乃教主隋唐と磨て
 猶現し赤松炎帝の女師秦漢小逮て還て
 好す東方曼倩之度瑤池れ桃と竊純陽
 呂祖每小岳陽の酒を酔是も皆仙術を
 長生しく樂あくる徳持談小い死の長老
 生ての非人よて一日を生て居るが



給へといふを。彼男打るも。いやと我に。依御と
御らん一向のあがら。いぢもあつ。目よ一字と。今
ともあつ。ねぢ。志年と。酒と。いづの二。備と。三
い。と。ち。く。色欲と。ち。と。く。の。事。火と。と。ら。し。ま。が。め。く
利欲のあつ。い。と。う。も。ん。と。考。さ。げ。け。し。お。別。の。乃
終りも。あ。し。生。必。相。換。國。と。て。文。治。建。久。の。と
謙余の志。希。希。下。世。と。治。め。治。ひ。一。以。と。と。あ。め。機。ま
時。自。今。日。の。や。う。め。う。と。う。推。ま。も。淨。當。理。と。う。て
ん。乃。ひ。一。か。和。國。の。義。也。秩。父。の。重。忠。と。始。め
そ。以。終。と。う。の。事。と。回。ご。も。い。男。の。先。て

早。終。は。者。と。て。大。お。う。あ。の。事。ハ。知。し。ぬ。お。え。て
只。故。九。命。希。長。と。稀。毛。れ。之。節。の。時。め。も。妻。細。い
物。終。せ。し。彼。女。あ。い。せ。し。後。役。あ。あ。と。ん。と。う
う。う。て。推。ま。ハ。お。の。が。信。忠。を。せ。と。あ。う。う。の。ま
し。と。希。有。あ。る。の。あ。ま。と。件。の。物。終。せ。し。う。バ
こ。こ。終。し。紀。事。ね。う。い。づ。り。て。あ。我。の。終。付。の
事。と。あ。ま。も。梶。原。は。我。に。く。ら。し。も。教。で。あ。う
らん。何。の。く。ら。ん。と。詳。か。い。し。も。た。も。飛。を。し。と
見。く。も。も。め。う。し。も。み。行。師。と。い。は。ん。と。も。こ
も。て。仕。あ。ひ。し。人。よ。あ。の。西。面。と。う。い。は。れ。あ。う

一が子の食とする松の葉。因東乃若くして。食と
する小塚。又西海は熱くことと。捨つて。飛が
る。よる。さう。さう。業とを。さう。さう。ね。あ。げ。半
ま。さ。に。く。さ。世の事。少く。又。小。浮。る。ゆ。よ。つ。む
是と。さ。く。心。一。時。の。快。き。了。百。年。乃。定。命。と。結。て
け。方。く。浮。世。の。薄。と。して。命。を。あ。な。け。る。是。乃
樹。酒。は。弱。き。子。地。との。伝。た。う。つ。て。百。葉。の。昔
く。又。十。計。れ。形。ら。う。て。業。し。く。所。作。望。園。成
小。社。す。や。口。う。う。ち。の。葉。の。妻。も。限。る。何。を
長。け。ん。さ。う。く。空。躬。履。せ。よ。う。く。の。伝。は。業。が

徳と。昔。乃。あ。明。せ。し。極。よ。い。く。病。と。ひ。て。免。お
り。ま。さ。醫。師。ハ。旬。毎。仙。神。を。殺。て。死。ま。む。あ。ら。る。が
世。ら。の。習。家。う。よ。古。今。の。道。と。さ。り。天。年。を。保。門
の。そ。ら。仙。神。は。い。ん。も。し。け。ま。身。も。ま。病。延。命。
あ。る。ぞ。一。そ。ま。さ。の。れ。と。思。へ

○ 獅 猴 の 相 撲

是。乃。の。心。さ。よ。あ。そ。が。本。の。葉。極。お。り。ま。ら。あ。や
ん。う。狂。ひ。戯。ま。し。つ。つ。お。て。う。女。方。小。ま。つ。れ
角。力。を。さ。う。つ。て。格。う。あ。す。い。さ。り。人。乃。は。業。の。遠。あ
し。ま。あ。い。と。越。後。一。か。は。路。ま。い。ま。ま。心。行。こ。ま。ん。を



兄弟二人交交しつゝをかりて長くたる物と切
小ハ長刀小太刀をわあ〜とだら〜と舟に漕入て
彼を動し。船より〜と。瞬ま〜とに浸り。該船の
舟着る。以の首をさす〜と。船と船を繋ぎ
〜と。せ〜と。眠る。先づ舟のほろ。漕切らげ
日〜と。長刀の。越え力と腕〜と。せ〜
切つものふ。ち〜と。切れて。尾をさ〜と。上
ねひらる。舟。ち〜と。思〜と。し〜と。
を。吉。は。ら。さ。ぶ。影。身。の。三。人。案。の。り。る。口。を。ひ。て
かう。こ。お。に。代。り。り。さ。む。た。多。く。首。と。手。を。ぬ

ゆるに晴つ〜と。〜と。大。河。船。後
舟。雨。降。と。つ。〜と。あ。り。華。る。え。悟。の。半。ち。る。ま。ハ
繁。る。舟。と。流。れ。流。〜と。漕。つ。て。急。小。舟。後。ぬ
あ。ん。よ。遠。い。も。系。柱。〜と。舟。の。浪。も。〜と。行。て。停。り
り。も。と。系。柱。〜と。船。ハ。強。く。系。柱。た。ま。バ。別。系。あ。つ
夜。と。ぬ。〜と。ち。て。百。州。た。大。場。あ。つ。て。兄。弟。の
舟。の。ち。る。半。と。怪。い。〜と。わ。む。の。難。と。〜と。首。れ
な。〜と。〜と。い。ぬ。〜と。〜と。お。〜と。〜と。あ。れ。を。こ
そ。京。より。百。石。舟。の。湖。あ。の。中。に。漕。〜と。行。く
り。る。大。の。四。斗。橋。あ。つ。今。廿。四。〜と。あ。〜と。〜と。〜と。

許しとて侍りし。中にも感ずる事少くも
 ける。のる教行田令ふまはらる事お我い
 又里もくくく。行心里小も同社ありて
 弓射の道鏡と系ありあるや云。社をさ
 崔下唐が著るかに。常陸云る原といふ所
 道鏡の祠ありて記しぬ。余程ありし。毫
 行心より。か。の事もしりし。行る。但し
 彼書に。云原の道鏡を文を。谷をるて
 皇極天皇の宮のりしとて。行小人王十六代
 孝謙天皇。ゆび位よつる。皇極天皇と

中女帝あり。聖武天皇。母光明后皇
 とり。暗記の失あり。皇極帝。其母乃
 王の妃あり。人王三十代。代々帝。母若留の
 王あり。ゆび位は。行る。母の天皇と
 奉了。孝謙天皇。人王十六代の帝あり。

皇祿の事。称徳天皇と。我中より。皇后
 の名を顛倒せり。病ありて。校正小徳も。門人
 是とて。孝謙天皇と。皇極
 帝とせん。し。は。大なる誤あり。自家
 門前。書。抄。他人。誤。これ。霜。誤。

壑がよりいづくん。そむに流あり。又彼と流物乃
まうら。東の方に牛飼いしに割れ。流川の
中より。昔牛落入て。ゆらびおぼ。こま伝入る
早懸すもい割れあり。いさうも減る半なり
若むてうはく。田に水あるは。葉はを村一圃小い割く
あつて。おとけ。まてでに半に。急雨降か
百姓をと抽く。笑ひみ。昔より。か
かめて。おとけ。とさう

○滝口の章奥

同一所の浦つみし。あまぬ日。津津夕風長閑

よて。んるめと奇る儀に柱ひ。あまうもるたなな
小ね。海人乃志わら。いやは海あまをん。我々の
あす。半をわく。流し月日と送る。半は。思ひそ
かそ。うら。うら。ぬけ。新。滝。竹林。といつる。林
り。打。文。舟。通。浦。之。所。林。ひ。海。せ。給。ま。さ。云
傳。く。後。と。煙。く。い。ま。む。定。て。殺。生。の。罪。を。い。そ
又。後。の。世。も。苦。海。に。沉。まん。半。事。と。祈。林。い。く。出。り。ひ
ふ。お。く。そ。か。る。半。い。あ。る。ん。き。め。く。わ。づ。ら。れ
う。ら。く。む。と。な。て。も。必。ま。お。め。の。く。上。東。大。小。早
して。田。知。や。ら。に。哀。果。而。此。飢。渴。小。苦。ま。り。る。時

才入日乃米。まに言に住家とあり。終小歸るに
妻子發して近隣よ若^{つや}若^若く^若る^若由^由り^由一^一命^命神^神れ
社^社より^{より}サ^サる^るて^て一^一段^段に^に骸^骸と^と浪^浪と^と打^打寄^寄り^り社^社て
あり^{あり}十^十が^が全^全作^作皮^皮骨^骨う^うつ^つな^なう^うて^て臍^臍腑^腑悉^悉く^く振^振
ま^まる^る。眼^眼ま^まて^てぬ^ぬれ^れる^る。先^先必^必流^流と^と羽^羽神^神の^の少^少を^を先^先
後^後一^一こ^こらん^{らん}者^者市^市の^のど^ど。其^其中^中に^に鈴^鈴の^のや^やう^うと^と
む^むら^らち^ちる^る羽^羽神^神の^の心^心を^をさ^さり^りて^て羽^羽神^神の^の心^心を^をさ^さり^り
とい^{とい}ふ^ふ理^理あり^{あり}。つ^つる^る凶^凶年^年に^にて^て民^民皆^皆不^不死^死を^を
神^神を^を衣^衣と^とお^おぼ^ぼし^しる^るや^や。流^流れ^れく^くお^おも^もさ^さむ^む
業^業耀^耀の^の後^後お^おく^くば^ばに^にく^く一^一こ^こも^も振^振ら^らぬ^ぬべ^べし^し

仲務の國字和歌の綱と我^我れ^れや^や公^公社^社世^世を^を救^救ふ^ふ
の神^神詠^詠の^のど^ど。氏^氏れ^れ亂^亂得^得と^と志^志の^のん^んみ^みれ^れま^まさ^さら^ら
なん^{なん}を^をお^おく^く臍^臍腑^腑と^とぬ^ぬく^く種^種の^の對^對小^小乃^乃ひ^ひ給^給らん^{らん}や^や
系^系す^すら^らに^に早^早ハ^ハ併^併の^の籍^籍れ^れ仕^仕業^業成^成一^一。振^振て^てま^まさ^さら^ら
籍^籍ハ^ハ牛^牛馬^馬と^と食^食ふ^ふと^とす^すめ^めら^らん^んハ^ハ人^人と^とな^なま^まさ^さら^ら
ゆ^ゆに^にあ^あら^らん^んる^るも^も籍^籍の^の牛^牛馬^馬と^と食^食一^一に^に
我^我れ^れも^も我^我れ^れも^もあ^あま^まあ^あ。信^信國^國扇^扇の^のり^りて^て信^信約^約
旅^旅人^人の^の牛^牛柄^柄
考^考人^人す^すと^と出^出て^てい^いぞ^ぞや^や大^大籍^籍の^の人^人を^をも^も取^取ら^らぬ^ぬ
怖^怖し^しと^と出^出て^て野^野を^を若^若く^く一^一時^時行^行が^があ^ある^る

年毎に有る商人のありし。その事とすつるが
今も忘れぬ。ある年の秋半。例が如く我宿を
旅者とせん。ある。荷物未だ。一日先に送ら
ず。其方いひあう。け年月通の別る路と
後よりあう。事。浪を毎るに。おの。月。清く
荒れ。出。く。あ。る。浪。の。あ。れ。き。ま。と
こ。の。あ。め。風。情。面。あ。う。ま。れ。志。げ。海。乃
面。を。伸。あ。う。若。し。る。志。の。陸。下。る。大。なる。法。作
の。首。二。つ。あ。い。ひ。物。く。商人。か。立。る。強。く。送。る。有。る
元。来。け。男。強。氣。なる。事。あり。し。也。女。も。思。ひ

狼指扱をみて。下。打。せん。流。け。し。に。け。る。お
商人。小。目。も。か。も。だ。強。く。サ。隔。し。也。井。馬。の。鬚。の
拾。て。あ。う。と。波。拍。あ。う。て。ま。ま。ま。お。り。し。た。附
あ。あ。あ。す。る。ま。ま。今。ま。ま。あ。い。か。ま。と。狼。指
の。し。ひ。も。て。あ。う。に。お。り。た。一。の。首。ハ。海。中。く。ま。ら。び
あ。ぬ。を。付。あ。て。用。新。ま。り。し。ん。ま。お。倒。さ。ま。て
け。れ。よ。に。只。と。か。ら。も。く。る。一。石。も。あ。つ。さ。緒。さ。う。る
け。不。苦。う。牛。こ。の。死。ら。と。持。白。地。さ。う。登。入。も。の
す。く。地。不。あ。れ。を。旅。人。ハ。路。小。出。づ。杖。ハ。杖。を。さ。し
十。商人。ハ。不。敵。の。強。強。か。う。ま。て。夜。中。も。之。に。送。ら



事
記
卷之二

十九

まるもさうし。正に夜もゆく。次は夜は。角文
 くる。お半は。寝よ。家内は皆寝た。まう。伴
 猫若の。寝せん。乃。枕り。あ。と。は。や。ん。ぬ。る。音
 外。の。う。て。起。上。り。て。え。ん。ま。を。又。の。猫。の。の。る。に
 来。り。ん。に。夜。の。時。を。引。出。し。首。の。引。く。為。に。後
 者。の。う。に。縁。部。と。引。出。り。と。進。借。り。子。捕。り
 皆。く。起。あ。り。よ。り。捕。れ。た。を。お。先。の。お。や。を。お。母
 あ。ん。ち。う。く。猫。を。お。殺。し。ぬ。中。に。お。母。の。な。る。を。の
 あ。り。て。け。猫。は。浪。人。の。命。を。入。る。な。れ。を。町。人。と。遠。の
 福。で。り。社。て。お。半。も。つ。う。う。し。お。父。お。も。る。お。母。と。お。

け。り。も。例。あ。り。孫。半。な。れ。け。り。誠。と。お。や。を。お。母
 西。谷。お。は。ち。う。に。埋。め。し。て。お。母。に。お。母。に
 云。け。深。く。埋。め。り。る。が。密。中。に。必。漏。れ。習。け。け。云
 ぬ。ち。う。う。浪。人。の。猫。を。殺。す。の。故。布。を。置。て。殺。し。れ。と
 け。お。は。ち。う。と。お。や。の。後。う。ね。浪。人。お。母。に。け。け。と。お。母。に
 殺。す。お。母。は。後。條。の。戲。臺。と。識。ま。し。入。る。お。母。の。お。母。に
 一。命。と。捨。り。る。お。母。の。死。と。お。母。を。お。母。の。お。母。に
 洞。の。袖。も。く。ら。ぬ。け。り。お。母。に。浪。人。お。母。を。お。母。に
 言。う。ま。い。對。面。せ。ん。と。云。入。る。に。お。母。に。お。母。に。お。母。に
 半。を。お。母。に。お。母。に。お。母。に。お。母。に。お。母。に。お。母。に。

つんと主人の意にまかす代に扱して何の
 用事も出さぬやと問ひければ金別紙もも
 和何なる指し方へあつて希代のあつた
 鎖守るは法に違ふことなり侍る字にてお
 ありまゝといふ。然し此まに假條の戯と
 畜類とあり。主は雅義と金前に入ん。た
 わりともいふ。つるもいふ。不佞の志
 久はせたりとあき體と。菜が善提と。送
 ちくけ。中に入ると。死體の
 行侍も知まらぬ。是非よ及す。ちくの
 外も

久は半六の意にまかす代に扱して何の
 用事も出さぬやと問ひければ金別紙もも
 和何なる指し方へあつて希代のあつた
 鎖守るは法に違ふことなり侍る字にてお
 ありまゝといふ。然し此まに假條の戯と
 畜類とあり。主は雅義と金前に入ん。た
 わりともいふ。つるもいふ。不佞の志
 久はせたりとあき體と。菜が善提と。送
 ちくけ。中に入ると。死體の
 行侍も知まらぬ。是非よ及す。ちくの
 外も

たも志とる

